図書ニュース

大阪府立北野高等学校図書館

第２号

2013．6.14 発行

今回は教育実習生の皆さんにご協力いただき、いくつか本を紹介させていただきます。テーマは、「大学生になって痛感した、なんで高校生の時に読んでおかなかったのだろうと思う一冊」です。高校生のみなさんにとっては興味深いものばかりなのではないでしょうか。（私にはどれもとても面白そうに見えます）

私は高校時代、忙しさを理由にしてあまり読書をしてきませんでしたが、（といいつつも通学中に読んでいたような…）振り返ってみると当時の読書は今の自分にとって大切なものになっています。皆さんもこれは、と思った本を手に取ってみてはいかがでしょうか。本の後にある【　】内の記号は図書館での請求番号です。

①　片瀬一男「ライフ・イベントの社会学」（世界思想社）

皆さんが思う「良い本」とは何でしょうか？私にとっての「良い本」というのは、自分の価値観を良くも悪くも崩してくれる本です。常に自分の価値観を崩しては新たに積み上げるということを繰り返していく中で、物事を捉える幅が広がっていくと私は考えています。大学で社会学の入門書を読み、「こんな見方もあるんだ！」と目から鱗がぽろぽろ落ちるような体験をしたので、皆さんにも社会学の本をオススメします。

この『ライフ・イベントの社会学』は取り上げているテーマは身近なもの（名前やダイエットなど）なので、読みやすい一冊です。どんなことが書かれているのか例を挙げてみましょう。セーラー服はもともと水兵の制服です。しかし、今では学校の制服ですよね。兵士の服、つまり戦うための服がなぜ学校の制服へと変化したのでしょうか？考えたこともないでしょうが、いざ考えてみるとすぐには答えを思いつきませんよね。こういった当たり前すぎて気づかないことにも目を向けて、考察を加えていくのが社会学です。興味を持った方は是非ご一読を。

②河合隼雄「大人になることのむずかしさ」(岩波書店)【371/K14/2】

成人式が形式的なイベントとなり、大人への通過儀礼という意味をなさなくなった現代、何をもって大人と言えるのか。著者がカウンセラーとして向き合ってきた幾人かのクライアントが抱える問題、そしてどのように解決へと向かったかを事例として取り上げながら、

現代人が大人になることとは何かを軸として書かれている。
　多くの人は初め大人と子どもの関係で親と接する。そのうち親に反抗したり、何となく遠ざけたりする期間が大なり小なり表れる。そのような疎な関係を経る再び親に悩み相談をしたり親を労ったりして、大人と大人の関係で親と接する。親を遠ざける期間において、人によっては引きこもりや、犯罪、良くない人間関係を持つなど心身の上で様々な問題を抱える。古来の海外の成人式では抜歯を行ったり尿道の一部を切り取る等「死」と象徴される行為を経ることで大人への仲間入りをした。このような「死」と象徴される行為と、上記に挙げた現代人が大人になる前に抱える問題を関連付け、その意味を見出している。

③左巻健男「面白くて眠れなくなる化学」(PHP 研究所)

　私は生物の勉強がしたくて理系を選択したにも関わらず、数学も化学も苦手…そんな高校生でした。この本と高校生のときに出会っていたら、とっつきにくいと感じていた理系科目（化学、物理、数学）のハードルをさげてくれた気がします（この本は去年の春に出版された本なので高校生のときに巡り合うことは実際に不可能でしたが…)。この本はもう一歩踏み込めば身近なことでも面白い化学の題材になることについて、いくつもの題材が紹介されています。例えば、「水や醤油を飲みすぎるとどうなるか」や「折り紙の銀、ケーキの銀色（アラザン）の粒の正体は？」などが取り上げられています。「窒素肥料の合成について」では、当時の歴史的背景やかの有名なハーバーボッシュ法も取り上げられています。理科の範囲を超えた他科目との関わりも感じられるので、分野を超えて断片的な知識がつながる面白さもあります。さらに同じシリーズである数学・物理・人体編もオススメしたいと思います。理系科目は計算や理論ばかりでとっつきにくい、という思いのある方は一度手に取ってみてほしいです。

④百田尚樹 「永遠の 0」(講談社)【913/H59/2】

　最近話題の一冊。ストーリーは、現代を生きる姉弟が、終戦間際に特攻隊で亡くなった祖父について調べるため、祖父のかつての戦友の元を訪れて、祖父の話や戦争体験を聞いて回る物語です。序盤、彼らの祖父である宮部久蔵は、愛する妻と娘の元へ帰るために戦いで功績を挙げることよりも自らが生き延びることを優先する臆病者であった、という証言が出てきます。また、腕のいい零戦（当時の日本軍の主力戦闘機）パイロットであったため、特攻隊となっても生き残れたはずだという人もいます。死を選ぶことが美徳とされた軍隊の中で命の大切さを説く宮部の姿には、「生きるとはどういうことか？」を考えさせられます。そして、この宮部は何故亡くなったのか。本書の終盤、衝撃の事実が明らかになります。

平和だけど何か生きにくさを感じる今の世の中。高校生の皆さんは、大学進学に際して自分の将来について考え、思い悩むでしょう。「生きるとは一体？」時代は違ってもこれは人類普遍のテーマです。終戦間際のある兵士の姿から、平和の大切さと人の生き方について考えてみてはいかがでしょうか？

⑤中澤旬子「飼い喰い――三匹の豚とわたし」（岩波書店）

私は、今年の２月から、大学の付属農場で生活しています。私が初めて農場を訪れた時、そこには作物や果樹だけでなく、たくさんの黒毛和牛がいました。牛を間近にみたのはこの時が初めてで、今まで「肉」しか見たことのなかった私は、牛をはじめとする家畜に強い興味を抱きました。そんな時に書店で見つけた本が、中澤旬子『飼い喰い』です。世界各地の屠場（牛や豚を肉にするところ）を取材した著者が、自ら種類の異なる３匹の子豚を手に入れて、同じスペース・同じエサを与えて肥育し、育てた豚を自ら食べた経験が詳細に描写された一冊です。豚の交配、出産の様子に始まり、豚が育っていく様子、そして大きくなった豚を屠場に連れて行き、肉に加工されていく様子、そして最後に、加工された肉をみんなで食べる様子が、きれいなイラストと共に描かれています。その本を読んで心を動かされ、私も 11 月に、自分で鶏を殺し、その肉を食べる講座を受講することを決めました。「命を戴く」ことを体と心に焼き付けたいと思ったからです。

⑥新藤晴一「時の尾」（幻冬舎）

ポルノファン必見！あのポルノグラフィティのギタリスト、ハルイチが小説に挑戦してみた作品。小説初挑戦ながら、ハルイチの作る詩から滲み出る繊細さ、表現のうまさが凝縮された一冊です。ストーリーとしては少し難しい内容だが、巧みな比喩表現などにより、容易に風景が目に浮かぶ。

私が高校を卒業した年の５月に刊行されたので、高校在学中には読むことができなかったが、主人公のヤナギの気持ちは大学生よりも高校生の方が近いものがあると思うので、高校生のときに読んでおきたかった一冊だ。高校時代と大学生になってからとで、読んだ後の感じ方がどのように変わるか、自分で比べてみると面白いかもしれない。

「20 年に及ぶ内戦が残したのは、荒れ果てた街並みと、多くの難民、そして孤児だった―ヤナギは、元少年兵たちの集まる自治区の片隅で暮らしている。小柄で細身な見た目に反し、戦場での経験から人を傷つけることに一切躊躇いを持たない彼は、歓楽街で売春婦のボディガードとして雇われていた。一杯の粥を仲間と分け合い、麻袋を被って眠る日々。生き延びることしか望めない場所にいても、ヤナギには、決して忘れられない人がいた。」

⑦マルクス・アウレーリウス、神谷美恵子訳「自省録」（岩波書店）【081/I1-4】

印象に残った言葉を引こう。“あらゆる行動に際して一歩ごとに立止まり、自ら問うて見よ。「死ねばこれができなくなるという理由で死が恐るべきものとなるだろうか」と。”

世界史で登場した長ったらしい名前のローマ皇帝に覚えのある人もいるだろう。本書は、もともと人に読ませるために書かれたものではなく、題名の通り、戒めや自らを省みた記録が綴られた手記である。ストア派の哲学に親しんだ彼の、小難しい呟きを全て理解できるとは思わないし、その高みの精神に一飛びに達することはできない。しかし興味深いのは、読んだその時の年齢や精神状況によって受け止め方が変わってくることだ。落ち込んだ時に読むと励まされたり、以前は素通りした文が、ある時深く心に残ることもある。構成もなく短い文章の集まりなので、どの頁から開いてもいい。決してお上品な道徳訓ばかりではなく、時には怒り罵り、絶望や自己嫌悪に呻く、2000 年前に生きた孤独な皇帝の心の声が聞こえてくる。最初は枕元に置いて、睡眠薬に使うもよし。年齢を重ね、折に触れて読み返す度に、新しい何かが見つかるかもしれない、そんな本である。

⑧高橋昌一郎「理性の限界　不可能性・不確定性・不完全性」（講談社現代新書）　【116/T-5/1】

何のために毎日こんなに勉強しなきゃいけないの？行き詰まった時、一見頭が痛くなりそうなこの本がむしろ何かしらのヒントをくれるかもしれません。

友達と遊びに行く先を多数決で決めたら、皆が最も行きたくない目的地になった？いかなる民主的な投票方式も、完全に公平ではない？こうした多数決や選択の限界をはじめ、科学や論理的思考の限界について、さまざまな登場人物がパネルディスカッション形式で議論するという構成を通して専門用語を極力使わずに書かれています。

Science 好きの高校生だった頃、教師である父親が机にそっと置いてくれたのですが、あらゆる「合理的」なものは決して万能ではないということが受け入れられなかった記憶があります。今になって思うのは、学ぶことには「わかる」という目的もあるけれど、それ以上に、何がわかることで何がわかっていないことかを吟味できるようになるためのものだということ。本当は明らかになっていないことがまことしやかに語られているケースを見破れるかどうか。それが、「合理的な愚か者」と「理性の限界」を知った賢者との分かれ道なんだと思います。